

Clare の 'Shadows of Taste'<sup>1)</sup> をめぐって

鈴木 蓮 一

## (1)

Tim Chilcott によれば、クレアの詩には“experiment”という共通の文脈はあるが、単純に年代的進展の跡を辿れない二つの詩型が認められるという。<sup>2)</sup> 非常に大雑把に言って第一の型の詩は自我抑圧<sup>3)</sup>・外的風景を、第二の型の詩は自我表現・内的風景をそれぞれその顕著な特徴としている。想像力の発展の問題を扱っていると目される 'The Progress of Ryhme', 'To the Rural Muse', 'Pastoral Poesy', 及び 'Pleasures of Spring', 'Emmonsales Heath', 'The Village Minstrel', 'The Moorehens Nest', 'Pleasant Places', 'Pleasant Spots', 'Impulses of Spring', 'A Woodland Seat', 'On Taste', 'Poesy', 'Dawning of Genius', 'To the Snipe' 等の詩と少なからず関連をもち、クレアの詩全体にわたってのキー・ワードとなっている 'taste' を理解するために、この用語についての最も包括的概念が提示されていると考えられる詩, 'Shadows of Taste' (以下STと略す) をここで読んでおくことは極めて有意義なことであると思われる。それはまた 'taste' と不可分の関係にある 'fancy' という彼の用語に付せられた特殊な意味を少なからず照射してくれるはずである。

## (2)

この詩の冒頭より 'taste' についての興味深い一節が提出される。

Taste with as many hues doth hearts engage  
As leaves and flowers do upon natures page  
Not mind alone the instinctive mood declares  
But birds and flowers and insects are its heirs  
Taste is their joyous heritage and they  
All choose for joy in a peculiar way

(ST 1-10)

自然という書物の頁の中で植物の様態が多種多様な色合いを呈するように、'taste' が人の心を魅了する仕方も千差万別であるという。さらに注目すべき点は、'taste' という本能的直覚的気質が人間精神のみならず、植物を含めるすべての生き物にも生得のものとして受け継がれているということである。'taste' は「喜び」("joy") を求め、生むものである。すべての生き物はそれら独自のやり方で直面する現実の事物から、W. Howard の言葉を借りれば、「喜びのために生息地を選択して」("choose for joy their habitat")<sup>4)</sup>、その喜びを享受するという認識は自然そのものが「審美眼のある」("tasteful", ST 9) ものであり、「学識のある」("learned", ST 11) もので、"Flowers in the wisdom of creative choice / Seem blest with feelings and silent voice" (ST 23-4) にみられる如く「知恵」を有

する生命力溢れる存在として概念化されている。

'taste' という能力の働きの結果についてクレアは例えばアカライチョウを

Though less beloved for singing then [than] the taste  
They have to choose such homes upon the waste  
Rich architects— . . .

(*'The Moorehens Nest'* 43–5)

と、ショウドウツバメを

With strangest taste and labour undeterred  
Drilling small holes along the quarrys side  
(*'Sand Martin'*)

といい、さらにモグラについても

Rude architect rich instincts natural taste  
Is thine by heritage—

. . .

No rude inellegance thy work confounds  
But scenes of picturesque & beautiful  
Lye mid thy little hills of cushioned thyme<sup>9)</sup>

というふうには描かれる。このように「最も一般的な意味ではその種にとっては共通であるが、細部においてはそれ自体に固有なやり方で環境と相互作用している」個々の生き物が示す 'taste' について J. Appleton は "Taste is an acquired preference for particular methods of satisfying inborn desires." と定義し、Danes Barrington は "... the bird also sings with superior judgment and taste" といい、T. Brownlow は「鳥はネジを巻かれたおもちゃではないし、最も一般的な意味において以外は機械的に予言できるものでもない」といっている。<sup>6)</sup> Appleton のいう「獲得された好み」は、'taste' は天性のものであるが歳月の流れと共に洗練 ("refine") されねばならないとするクレアの考えと矛盾はしないし、確かに生き物は「各々の独特な境遇に対して採るようになり、そうすることによって "natural taste" を獲得するべき、いくつかの生まれつきの能力あるいは本能を持ち合せて」いる。そして Brownlow が主張するように、そのようにして得られた「自然の taste」は、それを具備する生き物が「すばらしく」("rich") かつ「巧みな」("skilful") な「建築家」であることは「生き残りの問題」であるから、人工的なものに対立する自然的なものでもある。<sup>7)</sup>

この「知恵」は "power divine" によって "instinct" として生き物に与えられており、これによって彼らは生存状況に最適な形態を生み出す。'To the Snipe' では人間という危険物の侵入に対し、シギの「本能は避けるべき、安全でない境界を知っている」("instinct knows / Not safety's bounds to shun" 53–4) と感じられ、

. . . thy bill

Suited by wisdom good  
 Of rude unseemly length doth delve and drill  
 The gelid mass for food (17-20)

と考えられる。さらに自然の生命体の喜びは無生物界の現象のもつ喜びにまで拡大される。その一例として、森の中を流れる小川は、

Kissing the misty dewberry by its side  
 With eager salutations & in joy  
 . . .  
 Giving & finding joy  
 ('Woodland Seat' 1連)

と描かれる。それゆえ花も「自らのためにのみ生きているのではなく」、それを愛する者を含める他のものに喜びを与えるためにも生きていると感じられる。<sup>9)</sup> このように自然界は「情念」("passion")によって衝き動かされる「生き生きとした宇宙」("an animated universe")を構成し、この宇宙をクレアは"joy"とか"taste"という人間的な概念でもって説明しようとしているようである。

'Pleasures of Spring' (以下 PS と略す) では、一面ハリエニシダが生えた共有地のヒースは<自然>がその"tasteful care"でもって「五月が誇らしく身にまとう衣服」で覆ったものというように(349-50)「自然の taste」が強調される。「キアオジは審美的な客人のように / 絵のように美しい緑のモグラ塚の下に巣を造る」("The yellowhammer like a tasteful guest / Neath picturesque green molehills makes a nest" ST 9-10) という詩句にも明示されるように、「自然の taste」はその picturesque である状態を本質としているらしい。それではクレアの抱くピクチャレスクとは一体どういうものなのだろうか。それは自然の「乱雑な無秩序」("wild disorder")という表現に要約されるものであって、"rude"とも形容される「すばらしい混乱」("rich confusion" 'Pleasant Places')の状態でもある。少々長くなるが、ピクチャレスクである風景をよく表わしている例として、Brownlow によっても取り上げられているソネット、'Pleasant Places' を引用してみる。

Old stone pits all with ivy overhung  
 Rude crooked brooks oer which is idly flung  
 A rail and plank that bends beneath the tread  
 Old narrow lanes where trees meet over head  
 And gaps th[r]ough bramble hedges where we spy  
 A steeple peeping in the stretching sky  
 And heaths oer spread with furze blooms sunny shine  
 Where praise in wonderment exclaims divine  
 Old ponds dim shado[w]ed with a broken tree  
 These are the picturesque of taste to me  
 While the wild wind to make compleat the scene  
 In rich confusion mingles every green  
 Waving her sketchy pencil in her hand  
 That tints the moving scene

一行目の生い茂っている蔦や無秩序に曲りくねった小川、ハリエニシダの一面に咲くヒースやさえぎるもののない空即ち自然の事物は採石場や木橋、教会の尖塔といった人工物に対して優位を保ち、倒れた樹の陰ではの暗い小池も<時間>が自然物に作用した結果である。強調的に三度繰り返される“old”という語は時間の永遠性が採石場、小道、小池さえもその影響力のもとに掌握していることを意味しており、<自然>は<時間の流れ>と協同し、人工物さえも自然化してしまうことが暗示される。こういう過程の結果としての風景がクレアを感動させる「tasteのある絵のように美しいもの」(“the picturesque of taste”)なのである。換言すれば、「おのが感情をもたらずべく自然が / 永年その静かな作用をなすがままにされる場所」(“Where nature her own feelings to effect / Is left at her own silent work for years” ‘Pleasant Spots’) 即ち「狂気じみた おせっかいな重労働」(“mad meddling toils”)<sup>9)</sup>が行われていない、「乱雑でかつ美しい等閑にされた状態」(“a wild & beautiful neglect” ‘Pleasant Spots’) を意味する。こうした場所は、その中で生き物が生存可能な状況となっているから彼にとって重要なのである。‘The Moorehens Nest’ にみられるそういう場所のイメージは、“A close with molehills sprinkled oer its leas” (68), “A wood gap stopt with ivy wreathing pale” (70), “A wood bank mined with rabbit holes (73)”, “An old oak leaning oer a badgers den” (74) 等である。また先に引用したモグラについてのソネットの後半では

... when I climb  
 Thy little fragrant mounds I feel thy guest  
 & hail neglect thy patron who contrives  
 Waste spots for thee on natures quiet breast  
 & taste loves best where thy still labour thrives

となっているが、このイメージの本質は人工物に対する自然の優勢、自然の生命体の繁栄なのである。ヒースの「無秩序な光景は taste をもつ者にピクチャレスクな喜びを与える」<sup>10)</sup> (“wildered sight gives taste a picturesque delight”) という詩句はクレアのピクチャレスク観<sup>11)</sup> を収斂したものである。クレアの詩の「基本的構成要素」となっているものは Mario Praz によってリストアップされた “the Picturesque” の特質, “dazzle and flicker of effect, rapid succession of colours, lights and shades, ... roughness, sudden variation, irregularity”<sup>12)</sup> であり、これらの特質を求めてワーズワスが山の高みから見下ろす「広大な」パノラマに目を向けたのとは対照的に、クレアは「力強い細部」(“dynamic details”) から成る “micropanorama” を表現するために生け垣の樹木の列や草むらの中を密接してのぞき込んでいるという Brownlow の指摘は鋭い。<sup>13)</sup> 他のロマン派詩人の眼の多くが高い位置から下方へのパースペクティブを形成しているのとは異なって、クレアのそれは灌木の高さにあり、極端な場合モグラ塚の高さにまで低められる。この特異性がそれまでの伝統的な “bird’s eye” に対して彼の眼が “beetle’s eye” といわれる理由であろうし、この眼は “picturesque vision” の新たな領域を開拓したといえるであろう。

### (3)

さて、先程の引用に出てきた「taste をもつ者」(“taste”) とは人間についての言葉であることは明白であるが、次に人間における ‘taste’ に注目しておきたい。

And man that noble insect restless man  
 Whose thoughts scale heaven in its mighty span  
 Pours forth his living soul in many a shade  
 And taste runs riot in her every grade

(ST 45-8)

人間においても「taste はあらゆる度合で奔放自在にほとぼしる」という点で他の生き物の場合と同様である。「感じる心」("feelig") あるいは 'taste' をもたず、自然美に「不注意な眼」を投げかける「低俗な庶民」("the low herd") と区別される「心」("mind") を持った人間はこうである。

From these and different far in rich degrees  
 Minds spring as various as the leaves of trees  
 To follow taste and all her sweets explore  
 And Edens make where deserts spread before

(ST 53-6)

木の葉がさまざまであるように、多種多様な精神は 'taste' の導くところに従い、それがもたらす喜びを探究し、"Pleasure with man of taste is an evergreen it blooms with him thro all seasons & is always with him to gratify the mind"<sup>14)</sup> といわれる如く日常的で、ありふれた自然をエデンに変える<sup>15)</sup>。'taste' が人間精神をして自然の現象界をエデンの園として感受させる要因であることがここに明瞭となっている。「taste は天与のもの / 自然が授けることのできない靈感」("Taste is from heaven / A inspiration nature cant bestow" "On Taste") とされ、すべての人間に生得の「本能的気質」であるけれども、'taste' は洗練され、活性化されてはじめて、その作用力が獲得されるものである<sup>16)</sup>。だから、「感じる心」あるいは 'taste' がまったく精神に「染み込んで」いない状態ゆえに自然美に感動を覚えない「低俗な庶民」が存在する。こういう 'taste' が詩人や詩の読者において何ういう働きをするかが続いて述べられる。

In poesys spells some all their raptures find  
 And revel in the melodies of mind  
 There nature oer the soul her beauty flings  
 In all the sweets and essences of things

(ST 57-60)

「詩のもつ不思議な力にとらわれて」とは詩心に満ちた状態を意味するのであろう。その状態にある時にこそ「歓喜」が湧き起り、精神の妙な調べを楽しみ、自然はその事物のすばらしさと本質と共にその美を魂に与えるという。そして「詩のヴィジョン」の裡に捉えられた美は現実の美より「純化された」("refined") ものである。美の詩的イメージは現実のそれにたち勝るのだが、"Taste reads oerjoyed and greets her [beauty's] image there [in poesy's vision]" (ST 64) であるから 'taste' をもつ読者のみが美のイメージを読み取ることができるという。このように 'taste' は読者の側にも要求されている。詩的ヴィジョンの裡に捉えられ、永遠化される自然美のイメージはこういう読者にとって次のようである。

A pleasing image to its page conferred  
 In living character and breathing word  
 Becomes a landscape heard and felt and seen  
 (ST 71-3)

人間精神は 'taste' の作用によって自然の現象界をエデンの園として見ることは上述したが、詩人の場合におけるその心理過程を更にこう詳述する。

Some in recordless rapture love to breath  
 Natures wild Eden wood and field and heath  
 In common blades of grass his thoughts will raise  
 A world of beauty to admire and praise  
 Untill his heart oerflows with swarms of thought  
 To that great being who raised life from nought  
 (ST 125-30 イタリックは筆者)

詩人の詩想が「ありふれた草の葉」で「美の世界」を構築する行為は「あの偉大な存在」が無からこの世を創造したことと“raise”という同じ動詞でもって同一レベルに置かれる。確かに詩想は、それが現実を再現するという意味では、感情の模倣というよりある種の事実の模倣といえるかも知れない<sup>17)</sup>。しかしそれは自然現象をあるがままに模倣することではなく、あくまでも審美能力としての、また美を「享樂する」(“appreciate”)能力としての 'taste' が把握した美の世界を「想像力」(“fancy”)と協力して構築するのである。そういう 'taste' の作用の対象となる自然の事物は「ありふれて」いて、“grand”でも“novel”でもない。それは“wildered”, “rude”, “disorder”, “confusion”と呼ばれる、人間の art に優位する自然の状態<sup>18)</sup>即ちクレアのいう“the picturesque of taste”なのである。詩人の美的感受性・審美能力として、また詩作品の鑑賞能力としての彼の 'taste' については J. M. Todd が要約してこういう。

Taste does not transform nature in the way that Wordsworth's imagination does, nor is it a human emanation of emotion onto insensate objects; on the contrary, it appears to work on the human perceiver in such a way that he can see more of the beautiful in nature and in the poetry that describes it.

(In *Adam's Garden* p. 31)

クレアの 'taste' は「外的実在」の有する詩<sup>うた</sup>の喜びにできるだけ接近し、自然現象を変形しないことが大きな特徴である。自然美を感受し、これを享樂することが 'taste' の第一の働きである。この働きには、“Thus truth to nature as the true sublime / Stands a mount atlas overpeering time” (ST 77-8) というように「アトラス山」に喩えられる、不易で真の詩の基準としての「自然への忠実」が付随している。この基準は自我の抑圧が前提となっており、ワーズワスやコールリッジよりも「ずっと制限された見方」<sup>19)</sup>を露呈しているかもしれないが、クレアは「自然に忠実」という態度を真の詩の根本的要素として強調する。変形されない自然のイメージは

Sunshine and shade one harmonizing green  
 Where meads and brooks and forrests basking lie  
 Lasting as truth and the eternal sky  
 (ST 74-6)

というように永遠不滅の真実となる。こうして構築される「美の世界」は、'taste'に満ちた自然が創造する美や喜びを'taste'をもつ詩人がエデンとして感受することによって成立する。クレアの「自然への忠実」というのは自然の詩の喜びに満ちた模倣という意味におけるものであるから、その詩的ヴィジョンは単に自然を映し出すだけの鏡では決してない。美として感受された個々の事物やそのイメージとの'fancy'の関係については、“Associations sweet each object breeds / And fine ideas upon fancy feeds” (ST 133-4) といわれる。個々の事物が甘美な過去の連想を生み、想像力は事物のイメージによって増幅する。だが詩人の関心は自然の事物それ自体の印象にあるのではない。「事物のすばらしい印象」とは自然の事物が「住処」(“dwelling place”, “home”)の存在を保証しているイメージのことである。詩人が芳香、美しく彩られた羽根、美しい啼声ゆえに花、蝶、鳥を愛好するというのではなく、彼が「荒涼たる草地」(“the wild and meadow lea” ST 136)とか、「囲い込み」をし忘れたようにみえる「すべての人気がない放置された場所」(“each desolate neglected spot” ST 141)を愛好するのはそこで生き物が「住処」を所有でき<sup>20)</sup>、幸福に生を享楽できるからである。'fancy'は自然の事物についてこのように洞察する。

さて、自然の'taste'によって生じる自然自身の喜びと詩及び詩人の関連については'Impulses of Spring'における詩句を見てみたい。

Joy wakes and wantons all around  
 Love laughs in every call  
 Music in many hearts abound  
 And poesy breaths in all  
 (13-6)

自然の喜びはもの皆活気づく春の情景の中に認められ、自然のすべての営みの中に<詩>が存在するという。喜びに満ちた自然の事物が<詩>となるのである<sup>21)</sup>。

He [the poet] revels in the noise  
 Of waking insects humming round  
 And birds upon the wing  
 And all the gushing soul of sound  
 That echoes of the spring  
 For in their joys his own are met  
 (32-7)

詩人は生き物の躍動美を楽しむが、それは生き物の喜びと詩人の喜びが和合するときにはじめて可能となる。「詩は(自然の)すべてのなかに息づく」という詩句は、自然の事物のなかにこそ詩の素材・詩となりうるものが存在するというクレアの信念を表わしたものである。

次に詩人における 'taste' の第二の働きに移る。(筆者は第一、第二と分別したが、それは重要性の度合いを示すものではない) 第一の働きが自然の現象界の中に「庶民が無視する事物を見、尊重し」("see & value what the herd pass bye" 'A Woodland Seat' 33), 美と喜びを詩的感情でもって感受し、享受する能力のことをいうのであるが、第二の働きは詩を書く行為における「選択する作因」("a selective agent")<sup>22)</sup> としてのそれであり、この働きに関しては次のようなクレアの簡潔な文章が見出される。

Taste is a uniformity of excellence—it modifies expression & selects images—it arranges & orders matters of thought—but genius creates them<sup>23)</sup>

詩作における 'taste' は自然についての印象群のなかから不要なイメージを排除し、「詩想の問題」を適切に整理・配列しながら、ムラのない秀逸な詩を製作する「作因」であるという。だが「イメージ」や「詩想の問題」を創り出すのは 'genius' であるという。'genius' は 'taste' の第2の働きと結合して、自然を詩的に感受し、詩作する能力を詩人に与えると考えられる。'Dawning of Genius' における説明によれば、'genius' とは「精神の快い歓喜」("a pleasing rapture of the mind") であり、芸術家から教養のない農夫にいたるすべての人がもつ「燃え上る情熱」("a kindling warmth") のことであって、これらの存在ゆえに、'taste' が大切にし、最近の記憶が保持している「喜び」("joy") とか、自然への「共感」("sympathy"), また生まれ故郷にたいする「愛情」("fondness") が喚起されるという。つまりクレアの定義する 'genius' とは「歓喜」、「情熱」、「喜び」、「共感」、「愛情」といった精神の興奮状態の原型と見做されるものであって、教育や知的訓練の有無に関係なく、人をして 'taste' が選択した自然の美的イメージに感応せしめる詩的精神の属性である。羊飼いの経験という形で説明されるこの属性は次のような心理的過程を伴う。

Raptures the while his inward powers inflame,  
And joys delight him which he cannot name;  
Ideas picture pleasing views to mind,  
For which his language can no utterance find;  
Increasing beauties, fresh'ning on his sight,  
Unfold new charms, and witness more delight;  
So while the present please, the past decay,  
And in each other, losing, melt away.

(23-30)

'genius' の現われである「歓喜」は自然の事物を「並ならぬ喜びの源」("a source of transcendent joy")<sup>24)</sup> に変えてしまい、この源から生じる喜びを羊飼いは享樂する。25行目の「<sup>アイディア</sup>印象は精神に快い光景を想像する」とは精神に現われる事物の印象が自らと共に、それら印象を注入した光景をもたらすということであろうし、その光景と印象は合体し、名状し難い喜びになるという。この場合 "picture" という語は、想像的感受の際それに伴う即時の変形という特質を幾分与える動詞として用いられていると Howard は指摘する<sup>25)</sup>。'genius' の影響力によって羊飼いの眼に生き生きと映り、増大する美は新たな魅力を展開し、彼により大きな喜びをもたらす。



Thus pausing wild on all he saunters by,  
 He feels enraptur'd though he knows not why,  
 And hums and mutters o'er his joys in vain,  
 And dwells on something which he can't explain.  
 The bursts of thought with which his soul's perplex'd,  
 Are bred one moment, and are gone the next;  
 Yet still the heart will kindling sparks retain,  
 And thoughts will rise, and fancy strive again.

(31-8)

この一節で明らかなのは 'genius' によって結果的に生じた喜びを、瞬時的な詩想の激しいほとばしりを、'fancy' がイメージ化しようと努めることである。結局感覚感受の強烈さを表現するには言葉は不十分である<sup>26)</sup>との認識ゆえに、これを表現するためには 'fancy' は、詩想や喜びの原体験についての臆げになっていくが、しばしば甦ってくる記憶 ("memory") に頼らざるをえなくなる。自然に対する詩的反応の時に精神内部に生起する「詩心」("heart") を表象する「燃焼のメタファー」<sup>27)</sup>が詩作のプロセスを描くために用いられている。暖炉の燃えさしに喩えられる詩心やその「痛いほど快い感情」の衰微を迎えるとき、「記憶はその力を失い、想像力は逃げ去る」("The memory fails, and fancy takes her flight.")のである。

## (4)

さて、次に詩と 'fancy' の関係についてのクレアの考えをさぐってみよう。詩心が自然の事物を観察するとき、「歓喜に満ちた夢想」、「気高くする夢想」("dignifying dreams" 'To the Snipe' 80) はそこに美を認め、「熾烈な情熱は / 最も卑しい生き物さえ尊重する」('Poesy' 8連)。またこの詩心で見られると無生物でさえも生命が賦与される。

Objects of water, earth, or air,  
 Are pleasing to thy [poesy's] sight;  
 All live thy sunny smiles to share,  
 Increasing thy delight;  
 All Nature in thy presence lives  
 With new creative claims,  
 And life to all thy fancy gives  
 That were but shades and names.

('Poesy' 9連)

「詩の想像力」は影や名にすぎない事物に生命を与え、"fancy pictured...poesy" ('The Progress of Ryhme' 263-4) という詩句もあるように、事物から詩のイメージを作る役割をもつ。'fancy' のイメージ創造能力については、「白日夢」に耽る羊飼いの例をあげてみる。

Lifting his fancies to each passing cloud  
 & shaping every one that journeys proud

O'er its mysterious way to forms & things  
 That fancys visions to his memory brings  
 (PS 107-10)

羊飼いは流れ雲から「岩」, 「舟」, 「大理石の宮殿」, 「天上界の樓閣」, 「山陰」, 「愛しい谷間」といったイメージを作る。また 'To the Rural Muse' においては詩神に向ってこう語る。

The innoscent idolatry and love  
 Paying thee [rural muse] worship in each secret nook  
 That fancied friends in tree and flower and brook  
 Shaped clouds to angels and beheld them smile  
 And heard commending tongues in every wind  
 (63-7)

詩神への「無垢なる心酔と愛」がもたらす想像力は自然の事物に親密感を感じ、雲を天使の微笑する姿にも造形するが、"angels" によって暗示されるように想像の世界は地上の楽園<sup>パラダイス</sup>なのであって、まさしく "Each object to my ear and eye / Made paradise of poesy" ('The Progress of Ryhm' 223-4) となる。楽園を想像する 'fancy' はイメージ創造という詩人にとって不可欠の正の役割を果たすが、「現世の下卑た想いがこれらの夢想を汚した」("Lifes grosser fancys did these dreams defile" 'To the Rural Muse' 68) の如く、'fancy' という語は同時に負の役割を意味するものとしても用いられている。詩作におけるその負の役割についてはこういう一節がある。

O Poverty! thy frowns were early dealt  
 O'er him who mourn'd thee, not by fancy led  
 To whine and wail o'er woes he never felt,  
 Staining his rhymes with tears he never shed,  
 And heaving sighs a mock song only bred  
 ('The Village Minstrel' 222-6)

この引用では、想像だけで現実体験の裏付けのない、でっち上げの詩を書く詩人、「存在もしないし、存在もしなかった怪物」('To the Rural Muse') を描く詩人が非難されているようだ。「空想的な絵画やそれらの不自然な景物」("fancy pictures & their unnatural extras") についてのクレアの見解にも負の役割の拒否が明言されている<sup>29)</sup>。彼の 'fancy' はそのすべてが人間精神からのみ生成するのではなく、それは「確固として事実と根差して」なければならない<sup>29)</sup>。それは彼自身の端的な表現でいえば、「事実に基づく想像力」("matter of fact fancy") である。それゆえ "No, poetry lives in its simplicity, / And speaks from its own heart, to which all hearts reply." ('To the Rural Muse') という詩についての彼独特の定義が生まれる。詩はそれ自身の簡素を本質とし、詩自身の心情から語りかけるものであるから、読者は詩そのものに反応するという。こうした定義からすれば、詩というものは詩人の主観や感情のみを表現するものでも、自然現象をそのまま表現するものでも、また耳に快いだけの無意味な音楽でもない。それでは真の詩とは何ういうものだとクレアはいつているのか。'Pastoral Poesy' の冒頭の二行、「真の詩の本質はことばにあるのではなく / 詩想を表わ

すイメージにある」("True posy is not in words / But images that thoughts express") は<詩>についての信念の要約だと考えられる。以下この詩に表明される内容に則して彼の信念をなぞってみた。

"not in words" とは、詩はことばによる表現様式、つまり文体や韻律による音楽性ではないということであろう。詩のことばは詩想を表わすイメージをもたらしのに「適切な」("meet") ものであるべきで、かつ、例えばサンザシの花がそれを見る者にたちまち夏の季節感を与えるように、「常に生き生きとして」("ever green") 読者に「感情」("feelings") を与えるものだ。詩のイメージに関しては、

An image to the mind is brought  
Where happiness enjoys  
An easy thoughtlessness of thought  
& meets excess of joys

(7連)

というように、事物についての詩的イメージが精神に浮んでくると、「思想のことは考えない安楽さ」が幸福感を味合い、過度の喜びを体験する。そのイメージは思想を表わすものではなく、そこにあるものは幸福感と過度の喜びのみである。こういう時詩人にとって世界は「大変小さな場所」となり、「満された感情で包まれて」、その場所以外のすべての現実世界は存在感を失う。続けて「詩の能力」をこういう。

... its [poesy's] power  
May varied lights employ  
Yet to all mind it gives the dower  
Of self creating joy

(9連)

詩は「自ら創造する喜びという才能」を精神に与えるというけれども、自然の事物の中に感じられる「喜び」こそが詩作の原動力になっている。詩人にこの「喜び」があってはじめて詩が書けるのである。だから、クレアは自然の中では何処へ行こうとも、丘や荒地であっても、「どんな言葉が語るより多くを語る静寂を感じる」("I feel... / A silence that discourses more / Than [than] any tongue can do" 10連) のだし、

The poet in his fitful glee  
& fancys many moods  
Meets it [the wind] as some strange melody  
& poem of the woods

(14連)

というように「発作的喜び」と「多くの想像的気分」の状態にある詩人は自然の営為すべてを「自然の詩」("nature's poesy" 19連) として感受することができる。花を結わえる「粗造りの飾り小枝、

「苔むした葎ぶき屋根」, 「ツゲに縁どられた花壇」といった自然と人間の調和を示す事物さえ、あらゆる人に「嬉しい幸福感」(“cheerful blessedness” 26連)と「喜び」を感じさせる「詩の力」といえるものである。

So would I my own mind employ  
& my own heart impress  
That poesy's self's a dwelling joy  
Of humble quietness

(27連)

クレアは読者に幸福感や喜びを与えるような詩を書くことにおのが精神を用いたいし、「詩自体は控え目な静けさをもつ永続的喜びである」という信念を心に銘記したいと願望する。

### (5)

クレアの 'taste' から 'genius' 'fancy' 'poesy' へとそれらの意味付けと相互関連性の概観を試みてきたが、ここで “the man of taste” のもう一つの重要な特質と、'taste' と相反する “tasteless” という用語を ST を中心に概観しておきたい。

クレアの考える、'taste' をもつ人間の中に科学者も含まれていることは注目すべきことである。発見の意欲に燃えて、ヒースや森、荒野をさまよう「taste をもつ科学者」(“the man of science and of taste” ST 107) にとって「一片の苔」や「輝く翅をもった昆虫」は「富」であり、「宝物」であって「彼の精神の歓喜」(“the raptures of his mind” ST 100) を増大させる。この科学者についてさらにこう続ける。

His joys run riot mid each juicy blade  
Of grass where insects revel in the shade  
And minds of different moods will oft condemn  
His taste as cruel such the deeds to them  
While he unconscious gibbets butterflyes  
And strangles beetles all to make us wise

(ST 113-8)

「彼」はわれわれ人間を「賢明にするために蝶や甲虫を締め殺す」のであって、ワーズワスが「解剖するために殺す」(“murder to dissect”) といって科学を非難したのとは異なる。自然の知識ではなく、その中の「知恵」を得るために「締め殺す」という科学的態度についての認識は、特に環境破壊による種としての人間とその他の生命体の存続の危機感が高まる今日にあってはますます重要となるであろう。こういう意味で、クレアは「科学や学問は沢山だ」(“Enough of Science and of Art”) とはいえなかったであろうし、この認識ゆえに彼の博物学に関する記述も少なくないのである。また彼が詩人であり、同時に生物学者でもあることが前者の地位を落しめると見做す学者批評家がいたが、優れた生物学者でもあることは優れた詩人であることを阻害するどころか二つの領域に精通するという強みをもつことであると筆者は確信する。

ともかく科学者であっても詩人の場合と同様に「taste をもつ者」は「精神の歓喜」、「喜び」を経験することが特徴である。人間精神における 'taste' の多様性については "Tastes rainbow visions own unnumbered hues / And every shade its sense of taste pursues" (ST 119-20) といってこれを是認する。

"tasteless" である人間については「低俗な庶民」として上述したが、科学者が歓喜して発見する「宝物」を嘲笑する「下品な田舎者」("vulgar hinds") としても言及される。クレアは彼らを次のように説明する。

Their clownish hearts and ever heedless eyes  
Find nought in nature they as wealth can prize  
With them self interest and the thoughts of gain  
Are natures beautys all beside are vain

(ST 103-6)

彼らの「粗野な心」と「常に不注意な眼」は自然美を感受できない<sup>30)</sup>。「利己主義」と「利得の思案」が追求するもののみが彼らの自然美なのだ。「不注意な眼」という語句は、自然の細部に「密接した」("close")<sup>31)</sup> 観察眼とは違って外部世界よりも内面世界に眼を向けたため、その細部のヴィジョンを見失ったと考えられるロマン派詩人達を想起させる。「taste をもつ者」は "he peeps the leaves among / & marks with rapture how they [birds] brood their young" (PS 289-90) とか "his [Lubin's] fond inquiry us'd to trace / Through nature's secrets with unwearied eye, / And watch the shifting seasons' changing grace" ('The Village Minstrel' 524-6) と描かれるように、「詩的感情」で自然を "paradisial" なものとして見ると同時に密接して観察し、その「神秘」を探る者でもある。また鳥や蜂の奏でる「音楽」について "I caught with eager ear the strain" ('The Progress of Ryhme' 139) と回顧するように耳目は確固として自然の事物に向って開かれており、「思想のことは考えない安楽さ」という表現に端的に示される如く、精神の集中力が内面に向っていないことはクレアの科学的態度と符号する。因に、「機械的な文明は機械的な科学によって創られた」といった「反科学主義の」の見解はロマン主義の先入主であると、さらに産業革命期社会における大衆の「困窮と卑俗」を招来した原因は「科学の探究」("scientific enquiry") ではなく、「経済的生活のしくみ」("the organization of economic life") にあったと考察された<sup>32)</sup> ことは忘れてはならない。

'taste' をもつ人間と "tasteless" な人間の差異は次のようでもある。

Taste finds pleasure where the vulgar cannot even find amusement the man of taste  
feels excessive rapture in contemplating the rich scenery of an autumn Landscape which the  
rude man passes unnoticed<sup>33)</sup>

この「粗野な人間」が自然のすばらしさに対して "his eyes are dead & sees no praise" であり、耳も傾けず、注意も払わぬ、「彼の卑小な心をすべて占有している、不断の利己主義に満ちた機械的衝動」("a mechanic impulse of uninterrupted selfishness that occupys all his little mind") に駆られる人間であるのとは対照的に、「識別力のある者」("the man of discernment") にとっては、

there is happiness in contemplating the distant shapes of leaves of various kinds of

trees plants & herbs there is happiness in examining minutely into the wild flowers as we wander amongst them to distinguish their characters & find out to what orders they belong in the artificial and natural systems of botany<sup>34</sup>

といている。つまり「tasteをもつ者」は自然の事物を遠近両方から観照し、精査することに幸福を感じる人である。もっともクレア自身は、近くの形象に較べ「遠くの形象」は曖昧であるため、これにあまり興味を感じなかったようではあるが。また 'Emmonsales Heath' では "tasteless" と見做されるべき人間をこう描く。

He that can meet the morning wind  
And oer such [rude] places roam  
Nor leave a lingering wish behind  
To make their peace his home

His heart is dead to quiet hours  
No love his mind employs  
Poesy with him neer shares its flowers  
Nor solitude its joys

(49-56)

"rude" な自然即ちヒースの「静謐」を心の「安らぎの場」としない者は自然への愛は無論抱くことはないし、自然の中で孤独であることの喜びも知らないし、詩心も当然湧くことはない。こういう人間即ち「不断の利己主義に満ちた機械的衝動」に駆られた人間が「囲い込み」を推進したことは贅言を要さない。

Inclosure came, and every path was stopt;  
Each tyrant fix'd his sign where paths were found,  
To hint a trespass now who cross'd the ground:  
Justice is made to speak as they command;  
The high road now must be each stinted bound:  
-Inclosure, thou'rt a curse upon the land,  
And *tasteless* was the wretch who thy existence plann'd.

(*'The Village Minstrel'* 849-55 イタリックは筆者)

「囲い込み」を行う者は自然美を感受できない人々であり、自然環境のもつ生態学的意義についての無知から物質的富を追求する。彼らは同時に自然現象を<エデンの園>として感受できない、楽園から墮落した者と見做されている。こういう人々<sup>35</sup>によって遂行された「囲い込み」は自然と人間の調和を示すものとして指定された<sup>ゴールデン・エイジ</sup>黄金時代という理想の終焉を告げる。人間が「自然のエデン」の<sup>ヴィジョン</sup>姿を見失うことは、それを感受し、それに「参加し」("participate"), ことばによるイメージでこのエデンを再現する能力である 'taste' と 'joy' の衰退を意味する。というのは「囲い込み」以前の自然は<詩>と 'taste' に大変親密に関係していたからである。この農業改革が自然の様相を一変させ、その wilderness, rudeness, disorder を失わせたことはクレアにとって現実的ヴィジョ

ンの消滅をもたらし<sup>36)</sup>、彼自身の詩的<sup>アイデンティティ</sup>自己同一性への大きな打撃となったし、そのため自然と人間の調和の喪失感を招いた。だから<エデンの園>からの人間の墮落のイメージがクレアの詩の基本的パターンとなっているといえる。この改革によって“tasteless”である人々のみならず、<地上の楽園>を享受する能力でもある'taste'をもった人々さえも墮落に導かれ、自然と人間の調和についての彼らの信念も「侵蝕」されていくという意識と、この調和の崩壊を'taste'の衰退に伴う詩的ヴィジョンの喪失という形で自己の裡に見出すという意味で、自らもこの墮落の犠牲者になったという意識が高まっていき、極めて重要な1832年の「三つの失意の詩」が書かれることになる。

### 注

- 1) テキストは E. Robinson and D. Powell, eds., *John Clare* ('The Oxford Authors', Oxford U. P., 1984), Anne Tibble and R. K. R. Thornton, eds., *The Midsummer Cushion* (MidNAG and Carcanet, 1979), J. W. Tibble, ed., *The Poems of John Clare* (Dent & Sons, 1935), J. W. Tibble and A. Tibble, eds., *John Clare: Selected Poems* (Everyman's Lib., 1965) を使用した。
- 2) Cf. Tim Chilcott, 'A Real World & Doubting Mind': *A Critical Study of the Poetry of John Clare* (Hull U. P., 1985), p. 105, 136.
- 3) Chilcott は、第一の型の詩においては「自我は完全に事物の中で大変充実しているので、自我はそれ自体を独立した現象として認識する必要はない」ということやクレアの詩的体験が「重大な意義をもって達成された強烈さ」ではなく、「美化されていない、平凡なものに対してとられた本能的態度」であるのに反し、第二の型の詩においては「自我はそれ自体のみを統覚する」と説明している。(p. 223) またクレアの自我に関していえば、ワーズワスは<静寂>のうちに回想したが、クレアは<体験>についてこれを分析・抽象化することなく、直覚的洞察力でもって時代を超越するイメージを創造した。それは全人間的現実把握であり、selfless であると考えられている。
- 4) William Howard, *John Clare* (Boston: Twayne, 1981), p. 34.
- 5) Cf. Timothy Brownlow, *John Clare and Picturesque Landscape* (Oxford U. P., 1983), p. 38.
- 6) Cf. Brownlow, p. 128.
- 7) Cf. Brownlow, p. 129.
- 8) Cf. Brownlow, p. 126.
- 9) 'Walcott Hill and Surrounding Scenery' cf. Brownlow, pp. 60-1, 139.
- 10) 'Walcott Hill and Surrounding Scenery'
- 11) ここで必然的に想起される W. Gilpin のピクチャレスク観の要点は、Brownlow に従えば、次のようである。

"We must ever recollect that nature is most defective in composition; and *must* be a little assisted. Her ideas are too vast for picturesque use, without the restraint of rules. ... under these circumstances we see nature in her best attire, in which it is our business to describe her." (pp. 129-30)

さらに 'Genius' によって注視される自然の「一般的形象」("the general form") や「主要な特徴」("the leading features") を "the eye of taste" が容易に人間の言葉に「移しかえる」("translate") とする。またギルピンとクレアの自然美に対する心的態度の相違はこう解釈されている。

For all his love and appreciation of nature, Gilpin still regards natural beauty as written in a kind of foreign language, which must then be translated into human terms. But Clare sees it as his duty to learn that language, not to translate it or to dress up 'in her best attire', guided by 'Genius'. (p. 130)

- 12) Mario Praz, *The Romantic Agony* (Oxford U. P., 1970), p. 21.
- 13) Cf. Brownlow, p. 66.
- 14) 'Northampton manuscript' cf. Brownlow, p. 119.
- 15) ワーズワスも *Lyrical Ballads* 第二版の序文で "... the human mind is capable of being excited without the application of gross and violent stimulants" (*Poetical Works*, Oxford U. P. 1981, p. 735) と述べている。
- 16) And as his [Lubin's] years increas'd his taste refined  
And fancy with new charms enlighten'd up his mind ('The Village Minstrel' 531-2)
- 17) J. M. Todd によれば、クレアの最大の達成は自然の外的実在とそれが有する詩の喜びとに接近したことであり、彼の「自然への忠実さ」という詩句は「喜びに満ちた模倣」のもつそういう意味で用いられている。cf. J. M. Todd, *In Adam's Garden: A Study of John Clare's Pre-Asylum Poetry* (Florida U. P., 1973), p. 38.
- 18) 自然の disorder と人間の art の関係について Brownlow の次のような示唆的な一節が見出される。  
Clare believes that animals, birds, flowers, and insects have an inherent dynamism which is not reducible to the dictates of mechanical rules, but which operates from the laws of its own being, thereby demonstrating 'acquired preferences' when confronted by unique situations requiring creative action. Here, Clare is close to the critical theory of Coleridge, but he does not have Coleridge's faith in the power of the mind to dissolve, fuse, and reorder the minutiae of nature. He places his faith, perhaps too innocently, in the creative 'disorder' of nature, which becomes for him 'the truth of taste' as opposed to 'arts strong impulse'—the tyrannies of artifice... (p. 132)
- 19) Todd, p. 44.
- 20) But he doth love the wild and meadow lea  
There hath the flower its dwelling place and there  
The butterflye goes dancing through the air (ST 138-40)
- The warped and punished trunk of stunted oak  
Freed from its bonds but by the thunder stroke  
As cramped by stragglng ribs of ivy sere  
There the glad bird makes home for half the year (ST 143-6)
- 21) E. Robinson and G. Summerfield, eds., *Selected Poems and Prose of John Clare* (Oxford U. P., 1967) 所収の Messrs. Taylor and Hessey 宛書簡 (1822年) には "to look on nature with a poetic eye magnifies the pleasure she herself being the very essence and soul of Poesy" という表現がある。(p. 9)
- 22) Howard, p. 33.
- 23) J. W. and A. Tibble, eds., *The Prose of John Clare* (Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 228.
- 24) Howard, p. 35.
- 25) Cf. Howard, p. 39.
- 26) "Words are too weak, expression can't be had" ('To Poesy')
- 27) Howard, p. 36.
- 28) Cf. *The Prose of John Clare*, p. 214.
- 29) クレアの 'fancy' について Greg Crossan はその著 *A Relish for Eternity: The Process of Divinization in the Poetry of John Clare* (Universität Salzburg, 1976) において次の如く述べている。  
"... the fancy must be firmly rooted in fact, and not until the precise details of a scene have been furnished may the poet apprehend the landscape imaginatively as well as factually



that makes the poet's vision such as a special one" (p. 51)

なおクレアの説く<自然の fancy>については拙稿「Clare と Bird Poems の諸相」(熊本大学英語英文学 26号, pp. 8-10) でその一端に触れた。

- 30) "tasteless" な人々は "... those whose souls are dead to every dream / That waking spring throws round them..." (PS 189-90) と描かれる。
- 31) "... he [the man of taste] walks for hours... / So soft that birds hear not the feet that pass / Close by their nests..." (PS 286-9)
- 32) Cf. Raymond Williams, *Culture and Society 1780-1950* (New York: Harper & Row, 1966), p. 150.
- 33) A. Tibble, ed., *The Journal Essays The Journey from Essex* (Manchester: Carcanet New Press, 1980), p. 91.
- 34) *Ibid.*, p. 91.
- 35) 「閑い込み」を行う村人達に交わって生活するクレアは心境をこう語っている。"I live in a land overflowing with obscurity & vulgarity far from *taste* and books & friends" (Mark Storey, ed., *The Letters of John Clare*, Oxford U. P., 1985, p. 550) (イタリックは筆者)
- 36) Raymond Williams はその著 *The Country and the City* (London: The Hogarth Press, 1985) において、ロマン派詩人と「閑い込み」の関係についてこのように説述している。

And then it is very much to the point that the first general word chosen to describe the instigators of the 'curse' of enclosure is 'tasteless'. This connects with that structure of feeling which was beginning to form, from Goldsmith to the poets of the Romantic movement, and which is particularly visible in Clare: the loss of the 'old country' is a loss of poetry; the cultivation of natural feeling is dispossessed by the consequences of improved cultivation of the land; wealth is not only hard and cruel but tasteless. (p. 137)

### Clare's 'Shadows of Taste'

According to Tim Chilcott, Clare's poetry can be divided into two types: one is poetry of self-suppression, the other is that of self-expression. I've tried to grasp the meanings of Clare's "taste", concentrating on 'Shadows of Taste', 'The Pleasures of Spring', 'To the Rural Muse', and other poems. I've also tried to research into his conceptions of "genius" and "fancy", for they are intimately related with "taste". "Taste" as the instinct to "choose for joy" is inherited by all living things, as well as the human mind. Nature's taste can be seen in nature's disorder. "Taste" in the human mind is the faculty to perceive and appreciate natural beauty and joy, and to see nature as the Garden of Eden. In the case of poets, "genius" or "a pleasing rapture of the mind" causes "taste" cooperating with "fancy" to see and value the images of natural things, to create poetic images from them, and to express them as "poesy". The man of science, too, capable of being in rapture, has "taste". His taste is the faculty to approach closely and watch the things of nature and inquire into their secrets. Enclosure, to Clare, is planned and executed by the "tasteless", destroying disorder of nature or "Nature's Eden", and it has ruined the harmonious relationship between Man and Nature. So Clare feels he has lost his Edenic vision, his "taste" and "perception", and therefore his poetic vision.